

杜甫「同谷歌」の「狙公」について

後藤 秋 正

はじめに

乾元二年（七五九）七月、華州司功參軍の官を棄てた杜甫は、家族を携えて秦州（甘肅省天水市）に赴いた。しかし、秦州での生活も安定せず、吐蕃が侵攻する危険もあつて、十月にはここを去り、十一月には成州同谷（甘肅省成州）に入った。秦州から同谷に到る途次の紀行詩は、「発秦州」（『杜詩詳注』巻八）を始めとして「鳳凰台」（同）に至るまでの十二首が残されている。同谷で作られた詩は、滞在期間が一箇月に満たなかつたために、「乾元中、寓居同谷県、作歌、七首」（『杜詩詳注』巻八。以下「同谷歌」と称する）と「万丈潭」（同）に過ぎない。従つて「同谷歌」は、同谷における杜甫の生活と心境を知り得る貴重な作品と言えよう。「同谷歌」の冒頭の歌は次のように詠じられている。

有客有客字子美

客有り客有り字は子美

白頭乱髮垂過耳

白頭の乱髮 垂れて耳を過ぐ

歲拾橡栗隨狙公

歲どし¹橡栗を拾いて狙公に隨う

天寒日暮山谷裏

天は寒く日は暮る山谷の裏

中原無書歸不得

中原 書無くして歸り得ず

手脚凍皴皮肉死

手脚は凍皴し皮肉は死す

嗚呼一歌兮歌已哀

嗚呼 一歌す歌は已に哀し

悲風為我從天來

悲風 我が為に天より來る

「同谷歌」には、以下のような高い評価が与えられている。例えば李蘆（一〇五九〜一一〇九）は次のように、屈原と宋玉にも劣らないと述べる。²

太白遠別離・蜀道難与子美同谷七歌、風騷極致、不在屈・宋之下。

太白の遠別離・蜀道難と子美の同谷七歌とは、風騷の極致にして、屈・宋の下に在らず。

さらに、朱熹「跋杜工部同谷七歌」(『晦庵集』卷八四)は、「杜陵此歌、豪宕奇崛、詩流少及之者。」(杜陵の此の歌は、豪宕 奇崛にして、詩流 之に及ぶ者少なし。)と言う。また、何焯『義門読書記』卷五十一は「同谷歌」と張衡「四愁詩」及び蔡琰「胡笳十八拍」とを比較して、「七歌以擬四愁、其音節則胡笳十八拍、而奇健勝之。」(七歌は以て四愁に擬す、其の音節は胡笳十八拍到則り、而して奇健は之に勝る。)と指摘する。詩中において「同谷歌」に言及する例も多い。元・方回の七律「不寐」(『桐江統集』卷一一)の尾聯には次の句がある。

少陵同谷七歌在 少陵 同谷 七歌在り

每一歌之淚欲垂 之を一歌する毎に涙垂れんと欲す

同じく元・劉將孫の「雜詩」(全一〇句。『養吾齋集』卷一)は次のように言う。

3 子美窮念君 子美 窮して君を念う

4 同谷歌悲傷 同谷 歌いて悲傷す

秦州での生活も意に満たないものであったが、同谷での生活もまた困窮をきわめていた。「同谷歌」(其一)の第三句と第四句は、同谷における杜甫の日常を端的に語るものであり、杜甫がどんぐりを拾い集めて飢餓をしのいだと述べていることは、後世の詩人に対してとりわけ強い印象を

与えたらしい。宋祁(九九八〜一〇六一)の「和賈相公覽杜工部北征篇」(『景文集』卷七)に見える次の一聯は、「同谷歌」(其一)を念頭に置いた描写であろう。

少陵背賊走行在 少陵 賊に背きて行在に走り

採柶拾橡填饑喉 柶を採り橡を拾いて饑喉に填つ

柶は、野生の穀物。また、陳師道(一〇五三〜一一〇

一)の「和黃預感秋」(『後山集』卷一)には、

晚炊隣僧米 晩には炊く隣僧の米

昼拾狙公芋 昼には拾う狙公の芋

と言う。芋はどんぐり。その後も南宋末期から元の初期にかけての人である尹廷高の「奕山值寇、讀杜詩有感」(『玉井樵唱』卷中)には、次の句がある。

年荒難自給 年荒れて自ら給すること難く

拾橡當餼糧 橡を拾つて餼糧に當つ

これも「同谷歌」(其一)を踏まえて詠じられている。

さらに時代が下ると、順治八年(一六五一)の進士で桂林府治府に終わった程可則の「題杜少陵画像」(『杜詩詳注』諸家詠杜統編)にも、次の一聯がある。

牢落天涯到秦州 天涯に牢落して秦州に到り

負薪拾橡窮且愁 薪を負い橡を拾い窮して且つ愁う

「同谷歌」は後世に少なくない影響を及ぼしていると言

えるだろう。³

それでは、「橡栗」を拾い集めるために「狙公に随う」とはどのようなことを言っているのか、特に「狙公」とは何を指して言っているのか。これについては早くから二説が行われていたようだが、どちらの説が妥当なのか。「狙公」の解釈によつては一篇の理解が変更されることもあり得るだろう。以下、この点について若干の考察を試みることにしたい。

一

ほとんどの注釈は狙公の典故として、『莊子』齊物論篇のいわゆる「朝三暮四」の説話に見える一節を引用する。

狙公賦茅曰、朝三而暮四。衆狙皆怒。……

狙公 茅を賦わかちて曰く、朝には三にして暮には四にせんと。衆狙皆な怒る。……

『説杜心解』卷二之二、『杜詩鏡銓』卷七、『杜詩詳注』など、いずれも例外ではない。この説話に見える狙公について、赤塚忠『莊子上』（全釈漢文大系一六、集英社、一九七四）は、「ボス猿が柝の実を猿どもに分配しようとして言った、……。」と訳した上で、狙公については次のように言っている。長くなるが示唆に富む指摘だと考えられ

るので引用しておこう。

猿どもの頭（ボス）（李頤説）。『列子』黄帝篇には、太古の神聖な人は、万物の状態を知り異類の音声を解していたという説のあとを受けて、「……」⁴という話を載せている。これによつて、狙公を猿を飼育している者（崔譔説）、またはそれをつかさどる官（司馬彪説）と解している者が多いが、『列子』所載の話は明らかに齊物論のこの寓話を合理化した改作である。狙公も猿のボスとして、この話をまったく猿の世界のこととするほうが、皮肉も辛辣であろう。

赤塚氏が狙公を「ボス猿」と見なしていることにも注意しなければならぬが、『莊子』の狙公については早くから、ヒトとサルという二説が行われていたことが知られる。

それでは「同谷歌」〈其一〉の狙公について、従来はどのように解釈されてきたのであろうか。この点について、まず中国の諸注釈から見てみよう。

『草堂詩箋』卷十七は、狙が猿の一種だと認めた上で次のように言っている。

……狙、干与切。猿属、食橡栗也。按新唐書、甫居同谷拾橡栗、以自給。豈非狙公之比乎。後漢李恂拾橡栗、以自資。晋虞贛流離鄠杜間、転入南山中、絶糧拾

橡栗而食。列子黄帝篇……。莊子齊物篇……。陸德明音義、狙公老猿也。

……狙は、干与の切。猿の属にして、橡栗を食らうなり。按ずるに新唐書に、甫は同谷に居りて橡栗を拾い、以て自ら給すと。豈に狙公の比に非ざらんや。後漢の李恂は橡栗の実を拾い以て自らに資す。晋の虞贇は鄠杜の間に流離し、転じて南山の中に入り、糧を絶ち橡栗を拾いて食らう。列子黄帝篇に……と。莊子齊物篇に……と。陸徳明の音義に、狙公は老猿なりと。

この指摘について確認しておこう。『旧唐書』卷百九十下、杜甫伝には、

時関畿乱離、穀食踊賣、甫寓居成州同谷県、自負薪採栢、儿女餓殍者数人。

時に関畿は乱離し、穀食は踊賣す、甫 成州同谷県に寓居し、自ら薪を負い栢を採り、儿女の餓殍せんとする者は数人。

と言ひ、『新唐書』卷二百二、杜甫伝には、

関輔饑、輒棄官去、客秦州。負薪採橡栗自給。

関輔饑え、輒ち官を棄てて去り、秦州に客たり。薪を負い橡栗を採りて自ら給す。

と言ふ。若干の相違はあるものの、いずれも「同谷歌」を

踏まえて、秦州・同谷に滞在していた時期の杜甫一家が、飢餓に瀕していたことを述べている。

李恂の伝は『後漢書』卷五十一に見える。李恂、字は叔英は安定臨涇（甘肅省鎮原県の東南）の人。西域副校尉を経て武威太守となつた時に、事に坐して免ぜられ郷里に帰つた。彼の晩年のこととして「徙居新安関下、拾橡栗以自資。年九十六卒。」（徙りて新安関の下に居り、橡栗を拾いて以て自らに資す。年九十六にして卒す。）と言ふ。

虞贇は撃虞の誤り。『晋書』卷五十一、撃虞伝には次のような記事が見えている。

後歴秘書監・衛尉卿、從惠帝幸長安。及東軍來迎、百官奔散。遂流離鄠杜之間、転入南山中、糧絶飢甚、拾橡栗而食之。

後に秘書監・衛尉卿を歴、惠帝の長安に幸するに従う。東軍の來迎するに及び、百官は奔散す。遂に鄠杜の間に流離し、転じて南山の中に入り、糧絶え飢うること甚だしく、橡栗を拾つて之を食らう。

これらの記録においては橡の実を拾い集めて食べることが、困窮した生活ぶりを象徴する行為になっている。『後漢書』と『晋書』がともに「橡栗」としてゐるのを、『草堂詩箋』が「橡栗」とするのは杜甫の詩に引きずられたもの

であろう。

ついで『草堂詩箋』が引く「陸徳明音義」とは、陸徳明『經典釈文』卷二十六に見える「莊子音義」のことである。ここでは狙公について、

……司馬〔彪〕云、狙公、典狙官也。崔〔譔〕云、養猴狙者也。李〔頤〕云、老狙也。

……司馬〔彪〕云う、狙公は、狙を典る官なりと。

崔〔譔〕云う、養狙を養う者なりと。李〔頤〕云う、老狙なりと。

と云う。赤塚忠『莊子上』にすでに指摘があったように、狙公を、サルをつかさどる官職、あるいは人物とする説、「老狙」（年をとって經驗を積んだサル）とする説とが併行していたことは、「莊子音義」の指摘からも理解される。それでは中国の近年の諸注釈は「狙公」をどのように解釈しているのだろうか。いくつかにについて見てみよう。

蕭滌非『杜甫研究（下卷）』（山東人民出版社、一九五七）は、「狙公、養狙之人。……随狙公、可能是事實、因第四首提到林猿、可見這裏是有猴子的。」と云っていて、猿を飼う人とする。

山東大学中文系古典文学教研室選注『杜甫詩選』（人民文学出版社、一九八〇）は、「同谷歌」が「四愁詩」や「胡

笱十八拍」の単なる平板な模倣ではないことを指摘した上で、「注釈」では次のように言っている。

狙公、養猴的人。狙是一種大猴。椽子本來是猴子的食物、所以說「随狙公」。

これは蕭滌非の見解を踏襲したものであろう。金啓華・胡問濤『杜甫評伝』（陝西人民出版社、一九八四）も、「因為欠糧、他不得不冒着嚴寒、跟着養猴猴的『狙公』、到山谷裏采拾椽子充飢。」と述べていて大差はない。

陶道恕主編『杜甫詩歌賞析集』（巴蜀書社、一九九三）

「同谷歌」の条の執筆は曹慕樊は次のように述べる。

三四句極写窮困。妙在第三句用境幽峭寒苦、意象盡活。「歲」許是「步」字之誤。椽、堅果可食、名椽栗。《列子・說符》、「冬則食椽栗。」狙公、或以為畜養猴（即「狙」）的人、或以為「老狙」、均見《經典釈文》引、杜詩用後一義。但實是虛写、当把它看作想象・渲染、不是写实。比起王維的「行随拾栗猿」（《燕子龕禪師》）來、竟王倒平夷而杜却超妙。

ここでは、『經典釈文』の説を斟酌し、写実ではないと認めながら、狙公は老狙、つまりサルを指していることと見なしている。ここに引かれる王維の「燕子龕禪師」（全三四句。『全唐詩』卷二二五）には次の句がある。

15 行随拾栗猿 行くゆく栗を拾う猿に随い
16 帰对巢松鶴 歸りて松に巢くう鶴に對う

確かに杜甫の句は王維の句と類似しており、杜甫の脳裏にはこの句があつたのかもしれない。曹慕樊は『杜甫詩歌賞析』より四年前に刊行された『杜詩雜說統編』（巴蜀書社、一九八九）では、

三・四句極写窮困。妙在第三句用境幽峭寒苦、意象靈活、但是虚写、当把它看作想象・渲染、比起王維的「行随拾栗猿」来、竟王倒平实而杜却超妙。

と述べるのみであつて狙公には言及していないから、『杜甫詩歌賞析集』の分析はより詳細になつている。

韓成武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）の「注釈」には、「狙公、養猴の人。」と言ひ、「詠文」では「歳末追随狙公拾橡栗、……。」と言つてゐる。

王士禛『杜詩今注』（巴蜀書社、一九九九）の指摘は次の通りである。

狙、猿類。狙公、養猴人。他嘗用橡子来飼養猿類動物。随狙公、是說自己生活貧困、幾乎以拾橡子過活。

李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』（中国書店、二〇〇二）もこれと同じく、「狙公、養猴人。橡栗本是猿猴的食物。」と言ふ。『挿図本杜甫詩集』（万巻出版公司、二〇〇八）は

次のように述べる。

橡、指的是一種落葉喬木、它們種類很多、名稱也不同、南京的叫做櫟樹、浙江与東北那辺都叫橡樹、四川称之为青杠樹、是具有食用價值較高的野性植物。橡栗、指橡子、江南人經常用來做成豆腐。狙、指獼猴。狙公、養猴子的人。

橡に関する説明は詳細だが、狙公をサルを養うヒトとする点では変わりが無い。

ついでわが国における注釈類を瞥見しておこう。

鈴木虎雄『杜少陵詩集 中』（続国訳漢文大成、国民文庫刊行会、一九二九）は「字解」で、「狙公 さるまはし。」

と言ひ、「彼は山谷のうちで天寒く日の暮るるをりから、猿廻はしのことにつついて橡実とちのみや栗をひろうてゐる。」と訳す。黒川洋一『杜甫下』（岩波中国詩人選集、一九五九）は、「狙公 さるまわしのことか。」と言ひ、「そらは

寒く山の谷ぞこの町に日の暮れかかろうとするとき、さるまわしのことにつついてどんぐりを拾つてまわる、くる年もくる年も。」と訳している。

目加田誠『杜甫』（漢詩大系七、集英社、一九六五）は、語釈では、「狙公 さるを飼う人。さる曳き。」とし、訳では「年々のことながら、猿まわしのことについて、どん栗

を拾って歩けば、……。」として「猿まわし」を採用する。また、宇野直人・江原正士『杜甫』(平凡社、二二〇〇九)は、「私の近年はと言えば、どんぐりを拾い、猿を飼う人と一緒に歩き回っているような生活だ。」と述べている。さらに興膳宏『杜甫』(岩波書店、二二〇〇九)は、「毎年猿回しの後を追っては木の実を拾う身、……。」とする。これらは「歳」の訳し方においては相違があるものの、狙公の解釈については差異はほとんど認められない。このような状況にあつて、田中克己『杜甫伝』(講談社、一九七六)は、「毎年、トチや栗を拾って猿の跡を追っている」と訳し、森野繁夫『杜甫』(中国の詩人七、集英社、一九八二)は、「いつもいつも猿のあとについてドングリを拾う、……。」と訳して、いずれも狙公が「猿」であると認めている。以上述べてきたように、わが国においてはヒトと見なす説が多数となつていて、サルとする例は、管見では田中克己『杜甫伝』と森野繁夫『杜甫』の他には見あたらなない。

二

では、詩において狙公の語はどのように表れるのであるうか。

詩中に狙公を用いるのは、杜甫が最初であつて、それ以

前の用例は見られない。杜詩以外の用例は数少ないが、元和十一年(八一六)の夏に連州(広東省連州市)で書かれた、劉禹錫(七七二〜八四二)の「送僧方及南謁柳員外并引」(全三六句)、『劉夢得文集』卷七、『全唐詩』卷三五四)に見えるものが早い例であろう。『劉夢得文集』から引用する。

21 幽響滴岩溜 幽響 岩溜したた滴り

22 晴芳飄野叢 晴芳 野叢飄る

23 海雲懸颺母 海雲は颺母に懸かり

24 山果屬狙公 山果は狙公に属す

第二十四句、「狙」は『全唐詩』に「一作猿。」と言う。

この詩の末尾には次のような注意すべき自注がある。

按、狙公宜斥賦茅者、而越絶書有猿公、張衡賦南都有猿父哀吟之句、古文士又云樵父、由是而言、謂猿為父旧矣。

按ずるに、狙公は宜しく茅を賦つ者を斥くべし、而して越絶書に猿公有り、張衡 南都を賦して、猿父は哀吟すの句有り、古の文士は又樵父と云う、是に由りて言え、猿を謂いて父と為すこと旧し。

張衡が「南都賦」を賦したとするのは誤りであり、左思の「呉都賦」(『文選』卷五)とするのが正しい。「呉都賦」

に、「猿父哀吟、獐子長嘯。」(猿父は哀吟し、獐子は長嘯す。)とある。また、『越絶書』には「猿公」の語は見当たらない。後にも触れるが、これは「呉越春秋」に見える「袁公」の誤りであろう。「古文史又云権父」という一文は『劉夢得文集』には見えるが、『全唐詩』には見えない。「猿父」ならば唐詩においても、孫逖(六九六〜七六二)の「長洲苑」(全二〇句、『全唐詩』巻一一八)に次のように見えている。

15 山静吟猿父 山静かにして猿父吟じ

16 城空応雉媒 城空しくして雉媒こた応う

このように自注に引用される内容に正確さを欠く点はあ
るが、劉禹錫が「狙公」を、どんぐりを分け与えるヒトと
する説に従うのではなく、サルサルの意で用いていることは明
白である。このことについては瞿蜕園『劉禹錫集箋證』
(上海古籍出版社、一九八八)に指摘があり、陶敏・陶紅
雨『劉禹錫全集編年校注』(岳麓書社、二〇〇三)も劉禹
錫の自注を修訂した上で、「狙公、老獼猴。」と言っている。
李商隱(八一三〜八五八)の「贈送前劉五經映三十四
韻」(『全唐詩』巻五四一)には、次の句がある。

25 海鳥悲鐘鼓 海鳥は鐘鼓を悲しむ

26 狙公畏服裳 狙公は服裳を畏る

二句はいずれも『莊子』を踏まえており、第二十六句は、
天運篇の一節を踏まえる。

今取猿狙、而衣以周公之服、彼必齧齧挽裂、尽去而

後憊、觀古今之異、猶猿狙之異乎周公也。

今 猿狙を取りて、衣きするに周公の服を以てすれば、

彼必ず齧齧 挽裂し、尽く去りて後に憊あきたらん、古今の

異を觀るに、猶お猿狙の周公に異なるがごときなり。

海鳥と対になっていることからしても、狙公が『莊子』

の「猿狙」、サルを指して言うことは確かである。

皮日休(八三四?〜八八三?)には「狙公」の語が二例
見える。まず「奉和魯望四明山九題・鞠侯」(『全唐詩』巻

六一二)の例を引こう。

泉遣狙公護 泉は狙公をして護らしめ

果教獐子供 果は獐子をして供せしむ

羊春秋主編『增訂注釈全唐詩』(文化芸術出版社、二〇
〇二)巻六百六六は、狙公の注に『莊子』齊物論を引いて「養
猿猴の老人。」と言っている。しかし、これは左思「呉都
賦」を踏まえており、サルサルの一種である獐子と対になって
いることからしても、獐子とは別種のサルを指していると
考えられる。この詩の酬和の対象となった陸龜蒙、字は魯
望の「四明山詩并序」(『全唐詩』巻三五四)の序に、「有猿、

山家謂之鞠侯。」(猿有り、山家は之を鞠侯と謂う。)とあるように、皮日休はこれを念頭において「鞠侯」を「狙公」と言い換えたものである。四明山(浙江省の東部)に猿が多く棲息していたことは施肩吾「寄四明子」(『全唐詩』卷四九四)に、「長憶去年風雨夜、向君窻下聽猿時」(長く憶う去年 風雨の夜、君に向かつて窻下に猿を聴く時)と詠じられている。

また、「新秋言懷寄魯望三十韻」(『全唐詩』卷六一二)にも用例がある。

53 狙公鬧後戲 狙公は鬧さわぎて後に戯れ

54 雲母病來癡 雲母は病まみ來つて癡ちる

前掲『增訂注釈全唐詩』卷六百六は、この狙公について

「指猿猴。」と注を加える。質素な住まいの後ろではサルが騒ぎ戯れているというのである。なお、猿父の語は孫逖の「長洲苑」にも見えたが、皮日休も用いており、五律「樵子」(『全唐詩』卷六一一)の頸聯に次のように言っている。

将花餌鹿麝 花を餌もつて鹿麝に餌くらわせ

以果投猿父 果を以て猿父に投ず

これも左思「呉都賦」を踏まえて、てながざるに木の実を投げ与えることを言うのであろう。

このほか猿公は李賀「南園十三首」(其七)(『全唐詩』

卷三九〇)に一例が見えている。

長卿牢落悲空舍 長卿 牢落 空舍に悲しみ

曼倩詼諧取自容 曼倩 詼諧 自ら容れらるるを取る

見買若耶溪水劍 見けんに買う若耶溪水の劍

明朝歸去事猿公 明朝 歸り去りて猿公に事つかえん

この「猿公」は、李白「結客少年場行」(『全唐詩』卷二四・卷一六三)に見える「白猿公」と同じく、『吳越春秋』を典故として、劍術の名人である袁公を指して言うのであつてサルを指して言うものではない。

唐詩の用例は以上に尽きる。

おわりに

多くの注釈書類が典故としている『莊子』齊物論篇にしても、狙公についてはすでに二通りの解釈を有していた。繰り返しになるが、サルを管理する役人、またはサルを飼う人とする説と、「老狙」とする説である。近年の中国における解釈も二分されているが、サルを飼うヒトとする説が多数であり、『杜甫詩歌賞析集』のようにサルとする説は少数派に属する。わが国における解釈も、サルとする説は田中克己『杜甫伝』と森野繁夫『杜甫』にしか見られなかつた。

しかし、唐詩の他の用例、とりわけ劉禹錫が「送僧方及南謁柳眞外」の自注に言っているところを見るならば、唐人は「狙公」をサルと見なしていたと言えるだろう。その点では、瞿蛻園『劉禹錫集箋證』と『劉禹錫全集編年校注』は、自注を正確に把握しており、特に後者はこれを解釈にも反映させている。皮日休の詩も、狙公をサルと考えてこそ諧謔味が含まれることになる。また、王維「燕子龕禪師」の杜詩への影響も見逃すことができない。狙公をヒトとみなす多くの注釈は、これら他の唐詩を視野に入れていないのではなからうか。

ここで、『義門読書記』が先に引いた箇所が続いて、「第一首、……拾橡栗随狙公与下剛黄精皆言不可倚杖他人。固窮独立之意。」（第一首、……橡栗を拾いて狙公に随うと下の黄精を鬪るとは皆な他人に倚仗す可からざるを言う。固窮・独立の意なり。」と言っていたことを想起したい。狙公を猿を飼うヒトと解したならば、この歌から受ける杜甫の孤独感稀薄なものとなってしまうであろう。なぜならば「猿を飼う人」であるにせよ「猿まわし」であるにせよ、人間であることには変わりはないからである。杜甫は困難な旅を続け、知る人もいない山間の僻村である同谷に来て、飢えに苦しむ家族の食糧を確保するために、人気のない冬

の山中に分け入り、野猿のあとをついて行ってドングリやクリを探し求めては拾い集めるのである。サルと解してこそ「同谷歌」〈其四〉の末尾の林猿の語も生きてこよう。

有妹有妹在鍾離 妹有り妹有り鍾離に在り

良人早没諸孤癡 良人は早く没して諸孤は癡なり

……

嗚呼四歌兮歌四奏 嗚呼 四歌す歌四たび奏す

林猿為我啼清昼 林猿 我が為に清昼に啼く

時にはその後についてどんぐりを拾いに行つたサルが、鍾離（安徽省鳳陽県の東北）において、十年以上も会っていない妹を思う杜甫のために昼間から悲しげに鳴くのである。『杜詩詳注』が、「猿啼清昼、不特天人感動、即物情亦若分憂矣。」（猿の清昼に啼くは、特だに天人 感動するのみならず、即ち物情も亦憂いを分かたが若し。）と言っておりである。

穿ちすぎかも知れないが、狙公が「猿まわし」であろうと「猿を飼っている人」であろうと、サルを飼うことに慣れているヒトであるならば、陰曆十一月の真冬になつてからサルのお餌であるドングリを拾い集めることはしないだろう。早くから給餌の手配しておくはずだからである。もとより『杜甫詩歌賞析集』が指摘していたように、この表

現を写実とするか虚構とするかは意見の分かれるところであろう。誇張が含まれているかもしれないが、それは詩歌であれば自明のことと言える。それでもなお、狙公を、人間とは意志疎通を図ることのできないサルと解した方が、初めて足を踏み入れた同谷の山中における杜甫の孤独感、寂寞感、ひいては将来に対する不安感が伝わることになるだろう。

なお、どんぐりを拾うという表現は、杜甫「八哀詩 故著作郎・貶台州司戸滎陽鄭公虔」(全六四句)『杜詩詳注』卷一六)にも見えており、次の一聯がある。

43 履穿四明雪 履は穿たる四明の雪

44 饑拾樵溪橡 饑えては拾う樵溪の橡

これは至徳二載(七五七)十二月に台州(浙江省臨海市)の司戸參軍事に貶され、翌乾元元年の春に貶所に到った鄭虔(六八五〜七六四)の生活ぶりを描いたものである。サルこそ登場しないものの、杜甫の同谷における痛切な体験と密接に結びついていよう。

注

(1) このように読んだが、歳を歳末の意味とする説もある。また、『説杜詩説』卷八は、歳は飢に作る方が良いと言う。

(2) 『唐宋詩醇』卷二一による。

(3) ここに言及した作品以外にも、宋・李新には「龍興客旅效子美寓居同谷七歌」(『跨鼈集』卷三)があるし、宋・李炎には「杜工部有同谷七歌、其辞高古難及、而首節悲壯可擬也、用其体作七歌、觀者不取其辞、取其意可也」(杜工部に同谷七歌有り、其の辞は高古にして及び難し、而るに首節の悲壯なるは擬す可きなり、其の体を用いて七歌を作る、觀る者は其の辞を取らず、其の意を取らば可なり)という長題の歌(『双溪類纂』卷九)があり、明・徐燧には、「途中感遇、效同谷七歌」(『幔亭集』卷三)があるなど、枚挙にいとまがない。なお、『杜詩詳注』は「同谷歌」のあとに諸家の評を収めるほか、「同谷歌」に倣った文天祥「六歌」(『文山集』卷一九)を載せている。

(4) 省略した本文は以下の通り。

宋有狙公者、愛狙、養之成群。能解狙之意、狙亦得公之心。損其家口、充狙之欲、俄而匱焉。將限其食。恐衆狙之不馴於己也、先誑之曰、与若芋、朝三而暮四。足乎。衆狙皆起而怒。俄而曰、与若芋、朝四而暮三。足乎。衆狙皆伏而喜。

宋に狙公なる者有り、狙を愛し、之を養つて群を成す。能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。其の家口を損らして、狙の欲を充たせり、俄にして匱し。將に其の食を限らんとす。衆狙の己に馴れざるを恐れ、先ず之を誑かして曰く、若に芋を与えんに、朝に三に

して暮れに四。足らんかと。衆狙皆な起ちて怒る。俄にして曰く、若に茅を与えんに、朝に四にして暮れに三。足らんかと。衆狙皆な伏して喜ぶ。

小林信明『列子』（新釈漢文大系二二）、明治書院、一九六七）は、この章の「備考」で、「莊子」と「列子」との間には、明らかに話の筋に展開があるが、『莊子』の文の躍動的なのから見ても、やはり、たぶらかしを主とする『列子』の方が、『莊子』に取って修訂したものと思われる。」と述べている。

(5) その後『杜詩雑説全編』（生活・三聯書店、二〇〇九）に収録。

(6) 『全唐詩』は「茅」を「苜」に作る。「苜」が正しい。

(7) 『全唐詩』は「哀吟」を「長嘯」に作る。

(8) 左思「吳都賦」の「獼子長嘯」の句の劉逵注に、「獼子、猿類。猿身人面、見人嘯。」（獼子は、猿の類。猿身人面にして、人を見て嘯く。）と云う。

(9) 李白「結客少年場行」（『全唐詩』卷二四・卷一六三）に、「少年学劍術、凌轅白猿公」（少年、劍術を学び、凌轅す白猿公）とある。

(10) 『杜詩詳注』は「黄精」を「黄独」に作る。

(11) ただし、同谷から成都にかけての山中一帯に野猿が多く棲息していたことは事実であろう。本文中に引いた「同谷歌」（其四）も一例であるし、同谷に到着する直前に書かれた「泥功山」（『杜詩詳注』卷八）では、「哀猿透却墜、死鹿

力所窮」（哀猿、透りて却つて墜つ、死鹿、力の窮する所）と云うし、同谷から成都に赴く道中で詠じられた「白沙渡」（『杜詩詳注』卷九）でも、「我馬向北嘶、山猿飲相喚」（我が馬は北に向かって嘶き、山猿は飲みて相い喚ぶ）と詠じているからである。

(12) 杜甫は同谷の地勢について、秦州到着以前にもある程度の認識は持っていたであろう。至徳二載（七五七）に鳳翔の行在所で書かれた「送韋十六評事、充同谷防禦判官」（『杜詩詳注』卷五）で、「鑾輿駐鳳翔、同谷為咽喉、西扼弱水道、南鎮枹罕陬」（鑾輿、鳳翔に駐まる、同谷は咽喉であり、西は弱水の道を扼し、南は枹罕の陬を鎮す）などと述べているからである。しかし、実際の同谷での生活は、想像をはるかに超えた悲惨なものだったのである。

（北海道教育大学札幌校）